



BUKKYO UNIVERSITY

教授法 開発室 だより

vol.12

編集 / 教授法開発室

発行 / 佛教大学

発行日 / 2004年11月1日

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL.075-491-2141 FAX.075-493-9019URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>

今後の教授法開発室のあり方について

教授法開発室 室長 原 清 治

平成15年度までの教授法開発室の活動を総括し、そのうえで平成16年度以降の開発室のありかたについて以下にまとめてみたい。

まず、これまで本開発室の室員として、その指導的な役割を果たしていただいた西之園晴夫教育学部教授が退官されたことは、室にとって大きな損失であることは否めない。そこで、年度当初の室員会議においては、今後どのような運営方針でFD活動を構築していくのかという議論がなされた。本来、教授法開発室は、本質的に学生の学びをどのように支援するのか、さらに教職員の教授方法の開発にあたっては、いかに組織的に取り組むのかを考えるとそこにその中心的な役割があったといえる。

そこで、従来からの3部門(学習システム開発部門、情報調査部門、授業評価部門)は活動を継続するが、学生の自律的活動を支援するという視点からの見直しが模索されるべきであるという意見で一致している。そのための具体的な方法をいくつか示してみたい。

① I-supportシステムの検証

まず、本開発室の中心的な業務の1つである、I-supportのシステムを検証することが急務である。さらにこのシステムの講義への活用が、本来目指すべき自律的学習環境の構築に沿うものかどうかという点を中心に意見交換をするべきである。

② 授業評価アンケートの見直しについて

従来の授業評価アンケートは、その集計結果を各教員にフィードバックしていくことをねらいとしてきたが、今後は外部評価にかなったものとして展開していく必要がある。それは、アンケートの項目や調査方法といったミクロなレベルだけでなく、本質的に教育の評価がどのようにあるべきなのかというマクロな部分の再考が必要となるであろう。

③ 学生への学習支援

教授者からの学生支援に加えて、今後は、TAや授業補助スタッフをいかに機能的に活用するのかという視点が必要となる。また、学生指導にあたっては、現在行なわれている基礎学力調査をいかに有効に還元するのかといった問題とも関連させながら、学

生の「ポートフォリオシステム」を構築することが急務であろう。

④ 学生からの「異議申し立て」の制度化

学生の「異議申し立て」については、これまでも授業評価アンケートのなかで、その機会をもうけてきたが、そうした改善要求は全て授業担当者に返されるだけであり、学生からすれば「書きっぱなし」で改善が見られないという声が出始めている。こうした現状について、他大学では、「目安箱」を設置したり、学長などへメールで異議申し立てをする制度をもつところが少なくない。学生の声は、これからの大学教育を考える上において、無視できないものであるが、それをどのような方法によって収集することが、本学のFDとしてふさわしいのかは、さらに慎重な議論を要するであろう。

⑤ 教育支援のあり方について

本学には、教授側が自分の授業を改善しようと思っても、その具体的な方策を支援するシステムはないに等しい。さらに、研究の延長が教育であるという発想も、時代の中ではやや古めかしい言い回しとなり始めている。③で述べたようなTAの積極的な活用なども必要であるが、それ以上に専門的な授業サポートのための支援部隊が求められる。TAが授業中のサポートだとすれば、たとえば教材作りやコンテンツの構築などの助力をするスタッフを配置することも、教授者の側からFD活動を支えるために必要であろう。

以上、5点から本年度以降の教授法開発室の流れを概観してみたが、もう1つ忘れてはならないのは大学コンソーシアム京都との関連である。これまで、大学コンソーシアムは、9回のFDフォーラムを開催し、全国の大学の範となるようなFD活動のあり方を問い続けてきている。FD活動も本学独自のものを構築する一方で、大学連合としての議論が必要となってきている。つまり、「評価」は時代の流れであるがそれをコンソーシアムとしてどのように取り組み、佛教大学としてどのように具体化していくのかということを考えながら、今後のFD活動を進めていきたい。

今後とも教職員の皆様のより一層のご指導とご協力をお願い申し上げます。本稿を閉じたい。

「基礎学力調査」の結果

1. 調査の概要

教授法開発室では本学学生の総合的な基礎学力を把握することを目的として、平成12年度の新入生より基礎学力調査を実施している。今回はその5回目にあたる。試験問題には全国規模の就職対策試験を使用した(平成14年度より継続して使用)。調査は1回生と3回生を対象にして実施し、両者の違いをみた。また、3回生は平成14年度の入学時にも同一形式の試験を受けており、平成14年度と平成16年度のデータを比較することができた。

なお、学生には個人別データが送付され、ひとりひとりが全国レベルで学力の相対的位置を確認することができる。また、学生は卒業後の志望分野に応じて学習上のアドバイスを得ることができるようになっている。

2. 調査の時期および対象者数

(1) 1回生

- ①調査時期 平成16年4月6日(新入生オリエンテーション時)
- ②調査対象 1,470名(回答率98.3%)

(2) 3回生

- ①調査時期 平成16年4月5日(在学生オリエンテーション時)
- ②調査対象 1018人(回答率64.8%)

3. 設問内容

今回の調査は平成14年度および平成15年度と同様にA社の一般常識試験対策テストを用いた。制限時間は40分で、設問は120の小問から構成されている。設問の内容はこれまでと同じく「基礎常識」と「社会常識」とに分けることができる。基礎常識は高校の5教科に対応する「国語」「数理」「英語」「社会」の4科目、社会常識は社会人として心得ておくべき「日常生活」と「時事問題」の2科目から成る。

基礎学力調査の科目構成

基礎常識：高校までに学習してきた科目に対応
「国語」「数理」「英語」「社会」

社会常識：社会人としての知識と教養
「日常生活」…マナー・敬語、暦や習慣・生活習慣、
文の照合・図形の並べ替え
「時事問題」…政治・経済、文化・科学、社会・芸能・
スポーツ

以下、実際の設問をいくつか示してみる。

(1) 正答率の高かった設問は高校の学習科目の基本問題に相当するものである。例えば「We can see many stars in () sky」に適切な冠詞を補う問題、「著名な先生のコウエンを聴く」でカタカナを漢字に直す問題、「方程式： $-3(2X-5)=X-6$ 」の解を求める問題、「前野良沢と()はオランダ語の人体解剖書を翻訳して()を刊行した」に適切な語句を補う問題などである。これらの問題の正答率はいずれも90%を越えている。

(2) 正答率の低かった設問は「時事問題」のグループに多かった。例えば「2003年1月、第128回芥川賞の作家」を選択させる問題、「衆参両院とも一度議決した問題を同一会期中に審議することはない」という文章の正誤を判断させる問題などである。これらの問題の正答率は10%以下であった。

(3) 3回生が1回生より正答率が高かった設問は、「落語や講談、漫才などの演芸を興行するところを何というか」(3回生正答率65%、1回生正答率49%)、「7世紀に商人であった()が啓示を受けて預言者として自覚し、世界三大宗教のひとつである()を創始した」に適切な語句を補う問題(3回生正答率90%、1回生正答率81%)、「()行方正(行いの正しいこと)」の四字熟語に漢字を補う問題(3回生正答率50%、1回生正答率41%)などである。

(4) 1回生が3回生より正答率が高かった設問は、「功利主義とベーコン」が直接結びつくかどうか判断させる問題(1回生正答率35%、3回生正答率22%)、「なかかく言ふらむとかたはらいたし」(枕草子)の意味を判断させる問題(1回生48%、3回生37%)、「連立方程式： $3X+2Y=-5$ 、 $X+4Y=5$ 」の解を求める問題(1回生正答率82%、3回生正答率73%)、「Please make yourself () home. (気楽にしてください)」に適切な前置詞を補う問題(1回生正答率20%、3回生正答率11%)などであった。

4. 1回生と3回生の傾向

調査に用いたテストは通年に亘って全国の大学で実施されており、その実施時期によって問題が多少異なっている(とくに「時事問題」の設問が異なる)。そのため、全国と本学を素点で比較することが難しい。そこで、便宜上、T得点(標準得点が50.0の偏差値に準ずる標準化得点)を用いて本学学生の特徴をみることにする。ここでT得点を用いる利点は、全国レベルで本学学生の相対的位置が把握しやすい点である。

表1より科目別に1回生の傾向をみると、T得点が高い順に、「英語」(56.0)、「国語」(54.7)、「数理」(52.8)、「社会」(52.1)となっており、高校の5教科に相当する基礎常識の得点が高い。3回生のT得点でも、基礎常識の「国語」(55.1)、「英語」(53.0)、「数理」(52.0)が高く、また、社会常識の「日常生活」(52.0)の得点も高くなっている。ただし、1回生、3回生とも「時事問題」の得点が他の科目より10ポイントほど低く、全国レベルで平均をはるかに下回っている。

3回生は就職対策用に調査を受けていると考えられる。それにもかかわらず、「時事問題」の得点が全国平均よりかなり低く、1回生のレベルとほぼ同じである。平成12年度からの基礎学力調査(平成12年度と平成13年度はB社の問題を使用)を参考にしてもほぼ同様の結果が得られている。すなわち、過去5年間の傾向をみると、本学の学生は入学後も「時事問題」の知識をあまり身につけていないことがうかがえる。

1回生の「英語」は平成14年度、平成15年度の基礎学力調査でも3回生より得点が高く、全国と比較してT得点の上昇が続いている。過去3年間で新入生の英語力が上がってきてい

「基礎学力調査」の結果

ることがうかがえる。「英語」の設問内容は、基礎的な語法や語句の問題、英作文、文章読解から成っているが、1回生は3回生よりも英語の基礎的問題や英作文の正答率が高かった。

表1 T得点の平均値(回生別)

	全科目 総合	基礎常識				社会常識	
		国語	数理	英語	社会	日常生活	時事問題
1回生(1470人)	52.1	54.7	52.8	56.0	52.1	49.7	43.0
3回生(1018人)	51.6	55.1	52.0	53.0	51.5	52.0	42.3

5. 入試種別の比較

1回生を入試種別に分けると基礎学力に差がみられる。平成16年度は10種類以上の入試種別があり、1回生の学力差はかなり大きい。表2で、1回生をグループ分けしてみると、試験組(A日程、B日程、センター入試)と推薦組(公募制推薦、推薦A、その他推薦)とで基礎学力に差がある。

全科目総合のT得点で比べると、平均値が高い方から、センター入試(57.0)、A日程(53.8)、B日程(52.8)の順であり、試験組全体で53.7の平均値を示している。これに対して、推薦組は平均値が50.7である。科目別でみてもすべて入試組が推薦組よりT得点の平均値が高い。社会常識の科目は試験組も推薦組と同様に得点が低くなり、とくに「時事問題」は試験組、推薦組とも全国平均をかなり下回る。

表2 1回生のT得点の平均値(入試種別)

入試種別	全科目 総合	基礎常識				社会常識	
		国語	数学	英語	社会	日常生活	時事問題
A日程(514人)	53.8	56.5	54.1	57.3	53.2	50.9	43.1
B日程(224人)	52.8	54.9	53.0	57.5	52.7	49.9	43.3
センター試験(51人)	57.0	59.3	55.6	60.2	55.5	52.9	45.5
試験組	53.7	56.2	53.9	57.6	53.2	50.7	43.3
公募制推薦(323人)	50.9	53.9	52.1	54.2	51.3	49.0	42.8
指定校推薦(241人)	50.5	53.2	51.7	54.9	51.1	48.2	42.7
その他推薦*(63人)	50.0	50.7	51.2	55.5	49.7	49.9	42.9
推薦組	50.7	53.3	51.9	54.6	51.1	48.8	42.8

*「指定校推薦」は特別推薦入試A。「その他推薦」は特別推薦入試B、C、Dの合計。
(注)宗門後継者、留学生、編入生等の各種入試は学生数が少ないので省略

表3で、3回生をグループ分けしてみても、試験組(A日程、B日程)と推薦組(公募制推薦、指定校推薦)とで基礎学力に差がみられる。ちなみに、現3回生が1回生時に受けた基礎学力調査と比較してみても、同様の結果が得られる。すなわち、総合得点はA日程、B日程、公募制推薦、指定校推薦の順に高くなり、試験組が推薦組より平均値が高くなる。

表3 3回生のT得点の平均値(入試種別)

入試種別	全科目 総合	基礎常識				社会常識	
		国語	数理	英語	社会	日常生活	時事問題
A日程(366人)	54.2	56.8	53.5	55.4	54.2	53.7	43.0
B日程(149人)	54.0	59.2	53.5	54.1	53.0	52.7	43.3
試験組	54.1	57.5	53.5	55.0	53.9	53.4	43.1
公募制推薦(338人)	49.5	53.3	50.2	50.9	49.6	51.3	41.7
指定校推薦(114人)	48.1	51.6	49.9	50.6	48.2	49.9	41.3
推薦組	49.2	52.9	50.1	50.8	49.3	50.9	41.6

(注)センター入試、宗門後継者、留学生、編入生等の各種入試は学生数が少ないので省略

6. 入学後の基礎学力の変化

表4は、3回生の入学時調査(2002年4月)と今回調査(2004年4月)とを比較し、基礎学力の伸び率を学科別に示したものである(数値はT得点を基に算出)。全科目総合で伸び率の高い学科は臨床心理学科、中国語中国文学科、仏教学科の順になり、入学時点でT得点が低かった学科が入学後2年間で基礎学力を伸ばしたことになる。

各学科の特徴を科目別にみると、臨床心理学科が「日常生活(12.6)」、「国語(10.9)」、「英語(10.3)」で高い伸びを示し、「社会(8.2)」と「数理(5.7)」でも伸びを示している。中国語中国文学科は「日常生活(14.8)」で高い伸びを示し、「社会(8.6)」と「時事問題(6.5)」でも伸びを示している。仏教学科は「英語(12.4)」と「日常生活(12.4)」で高い伸びを示している。史学科は「時事問題(7.0)」と「数理(5.6)」で、社会学科は「社会(8.3)」と「時事問題(6.1)」で、社会福祉学科は「数理(5.5)」でそれぞれ伸びを示している。

全体的にみると、学科の特徴にみあった科目の伸び率が高く、入学時に比べて学科間の格差が縮まる傾向がみられる。

表4 3回生の入学後の伸び率(学科別)

	第一位	第二位	第三位
全科目総合	臨床心理(13.3)	中国語中国文学(12.9)	仏教(12.3)
国語	臨床心理(10.9)	日本語日文学(10.6)	英語英米文学(8.8)
数理	臨床心理(5.7)	史(5.6)	社会福祉(5.5)
英語	仏教(12.4)	臨床心理(10.3)	英語英米文学(9.2)
社会	中国語中国文学(8.6)	社会(8.3)	臨床心理(8.2)
日常生活	中国語中国文学(14.8)	臨床心理(12.6)	仏教(12.4)
時事問題	史(7.1)	中国語中国文学(6.5)	社会(6.1)

7. 課題

新入生の基礎学力は入試種別に差があること、また、本学に入学後も入試種別の学力差が解消されないことが確認できた。ただし、入学後に各学科の特徴にみあった科目の成績が伸びており、3回生時には学科間の格差が縮まる傾向がみられた。

全学的レベルでは、「英語」の基礎力を伸ばすことと、社会常識の中でもとくに「時事問題」の知識を身につけさせることが課題になる。また、学科もしくはコース毎に特色ある教育を行うことが、学生の基礎学力を伸ばす上でも効果的であると言っていよう。

(文責：近藤敏夫、集計：藤田智之)

2004年度 TOEIC Bridgeテスト利用による英語基礎力調査

- 実施日：平成16年4月6日(火)
- 実施対象者：1回生(文学部、教育学部、社会学部、社会福祉学部)
- 受験者数：1469人
- 平均点：117.6点

1) 英語基礎力調査

教授法開発室では、これまで「基礎学力調査」の一部という形で新入生の英語の基礎力調査を行ってきた。今年度より新カリキュラムが実施され、全学共通科目「英語」に習熟度別クラス編成が導入されるのにもない、従来の基礎学力調査に加えて、TOEIC Bridgeテストを利用し、独立した形で新入生の英語基礎力調査を行うことにした。

2) TOEIC Bridgeテスト

TOEIC Bridgeテストとは、初・中級レベルの英語コミュニケーション能力測定のために開発されたテストであり、TOEICテストよりも平易で、日常的な身近な内容が出題されている。量的にもTOEICテストの半分で、リスニング(25分・50問)とリーディング(35分・50問)の合計1時間・100問で行われ、スコアは2点刻みで、リスニング、リーディングとも各10点～90点、トータル20点～180点という形で表される。なお、TOEIC Bridgeテストには、5分野3段階評価のサブ・スコアというものがつけられる。

TOEIC Bridgeの実施・運営を行っている財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会によれば、TOEICスコア450点以下がTOEIC Bridge受験の、そしてTOEIC Bridgeスコアが160点に達した場合をTOEIC受験の目安として提示している。しかしながら、TOEIC運営委員会は、TOEICスコア450点とTOEIC Bridgeスコア160点には相関関係はないとしている。両者の明確な相関関係は公表されていない。

本学では平成14年度より、就職部によってTOEIC IPテストが実施されている。平成14年度のスコアから推定して、学年を問わず、佛教大学生の英語力はTOEICテストで350点前後であろうと思われる(「教授法開発室だより」第9号参照)。したがって、本学の新入生の英語基礎学力を調査するためには、TOEICテストよりも、TOEIC Bridgeテストのほうがふさわしいと判断した。

3) 教室環境の差異

今回の調査は、新入生全員を対象にしたものであり、原則的に、同一学科の学生は同じ教室で受験させることにした。したがって、同一学科内での受験環境によるスコアの差異はほぼないと考えてよい。しかしながら、音響設備の整っていない教室で受験しなければならない学科もあり、そのため、他学科と比較してリスニングにおいて不利な状況で解答しなければなら

ない環境にあったと考えられる。筆者は当日、リスニング試験実施時に全教室を回り、音響の具合を確認してみたが、社会福祉学部社会福祉学科の教室は、かなり不利な状況にあったと思われる。座席の位置にかかわらず、全体的に音量が小さく、しかもその音声がはっきりと聞こえてくるものではなかった。実際に、その影響は数値としてスコアに反映されているようである。

別の二学科が受験した教室も、テープ音声はやや不明瞭であったり、座席の位置によっては聞きにくいというようなこともあったが、社会福祉学科のように、スコア的に大勢に影響を及ぼしているということはないようである。その他の学科が使用した教室は、ほぼ同じ程度に聞き取りやすい環境となっていたようである。

4) 新入生の英語力

新入生の英語力であるが、表1のような結果となった。また、スコアの分布に関しては図1のとおりである。なお、9人の受験者は遅刻のため、リーディング・セクションのみの受験となったので、この9人は除外し、受験者総数は1469人としている。

トータル・スコアの平均117.6点をどのように考えるかであるが、TOEICテストの受験経験者が、1469人のうちわずかに17人であるということから、受験者がテスト形式に不慣れなため、普段の実力を出し切れていないということも考えられる。また前述のように、社会福祉学部の学生の教室環境が、音響施設の点で不利な状況にあったことも斟酌しなければならない。しかしながら、総体的には、TOEIC受験の目安となる160点を下回っているということやスコアの分布から判断すると、新入生の英語基礎力の測定方法としてTOEIC Bridgeテストがふさわしい尺度であったと言える。なお、160点以上の学生は8名であった。と同時に、大多数の学生にとっては、大学卒業新入社員平均点にあたるTOEICスコア450点や、新カリキュラム「英語」の到達目標であるTOEICスコア500点に到達することが当面の課題ということになってくる。

5) リスニングとリーディング

リスニングのスコア平均が56.8点、リーディングのスコア平均が60.8点であり、ややリスニングの方が低いようである。リスニング・セクションで不利な環境にあった社会福祉学部を除いた文学部、教育学部、社会学部の3学部だけのトータル・スコアの平均は120.1点となり、リスニング、リーディングの平均点はそれぞれ59.3点、60.8点となる(表2)。

サブ・スコアを見ると、社会福祉学部の学生が他学部の学生と比べて、リスニングの出来が悪かったということがわかる。サブ・スコアとは受験者間の相対的な評価を示すもので、5つのカテゴリーに関して、1～3の3段階評価がなされ、数値が高いほど他の受験者に比べて評価が高いということになる(表3および表4参照)。リスニングに関係しているのは、「Listening Strategies(聞く技術)」「Functions(言葉のはたらき)」の2つであるが、文・教・社の3学部のサブ・スコア(表5)と社会福祉学

2004年度 TOEIC Bridgeテスト利用による英語基礎力調査

部のサブ・スコア(表6)を比較してみると、社会福祉学部の学生は他の3学部の学生よりも、極端にリスニングの評価が低くなっている。社会福祉学部の学生は他学部生と比べて、元々リスニングとリーディングの能力格差が大きかったというような仮定もありうるが、むしろ教室環境のハンディが原因であったと考える方が妥当であろう。他学部と同じ条件であれば、社会福祉学部のリスニングのスコアはもっと高くなっていたと想定することも十分可能である。

6) サブ・スコア

リスニングのデータは不完全なものであるかもしれないが、サブ・スコアを見ると、総体的に「Listening Strategies (聞く技術)」よりも「Functions (言葉のはたらき)」を苦手としているように思われる。「Functions」とは、「どのような目的と意図(例:何かの申し出・要求・時間を伝える・指示・情報収集など)で英語が使用されているのか」を理解する能力である(TOEIC Bridgeホームページ参照)。

リーディングに関連するサブ・スコアは、「Reading Strategies (読む技術)」、「Vocabulary (語彙)」、「Grammar (文法)」となるが、この3つのうち「Reading Strategies (読む技術)」を苦手とする学生がやや多いようである。

サブ・スコアの結果から総合的に言えることは、リスニング、リーディングともに、言語の知識や基本的な能力は備わっているのだが、実際に言語を運用するという点で弱いということであろう。「英語の音声を聞き分けることができる」、「語彙・文法を知っている」だけではなく、その知識・能力をいかに実践の場で発揮できるのかということが、今後の学習のポイントの一つとなる。

7) 今後の課題

一般的には、トータル・スコアの平均点が示すように、一人でも多くの学生がTOEIC Bridgeスコア160点以上のレベルに到達することが教学目標となろう。リスニング、リーディングのいずれにおいても、まだまだ学習する余地は残されている。また、サブ・スコアの示すように、英語の実践的運用力の養成には特に力を注ぐべきであろう。

今回の英語基礎力で得た結果を基礎データとし、今後の追跡調査によって学生の進捗度を追跡してゆく予定である。しかしながら、単なる調査だけでは学生の英語力養成とは結びつかない。そこには今後の正課授業の運営および自主学習支援が大きく関わっており、教授法開発室の活動との連携により、より良い成果が得られることを期待したい。

〈文責：松本真治〉

表1 新入生全体のスコア(1469人)

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	117.6	56.8	60.8
標準偏差	18.2	9.8	10.7
最高点	170	86	88
最低点	62	28	30

図1 新入生全体のスコアの分布(1469人)

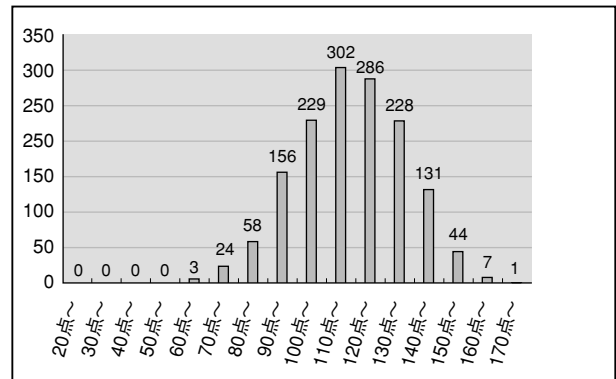


表2 3学部(文学部・教育学部・社会学部)のスコア(1167人)

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	120.1	59.3	60.8
標準偏差	18.4	9.0	11.0

表3 新入生全体のサブ・スコア(1469人)

	Listening Strategies	Functions	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
平均	1.46	1.43	1.70	1.85	1.89
標準偏差	0.59	0.54	0.64	0.64	0.63

表4 新入生全体のサブ・スコアの分布(1469人)

	Listening Strategies	Functions	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
1	863	864	591	428	389
2	533	574	728	830	859
3	73	31	150	211	221

表5 3学部(文学部・教育学部・社会学部)のサブ・スコア(1167人)

	Listening Strategies	Functions
平均	1.57	1.54
標準偏差	0.60	0.54

表6 社会福祉学部のサブ・スコア(302人)

	Listening Strategies	Functions
平均	1.03	1.02
標準偏差	0.18	0.15

第1回 FD座談会 佛大における外国語教育について

出席者 ■ 文学部人文学科 太田 修(朝鮮語) / 文学部中国学科 若杉邦子(中国語)
文学部英米学科 松本真治(英語) / 教授法開発室 下野隆喜

第1回のFD座談会は、今年度より実施された新カリキュラムの特色の一つである外国語教育改革について、英語・中国語・朝鮮語を担当する若手教員にそれぞれの視点から忌憚なく語っていただいた。白熱した対談は優に4時間を超えるものとなった。



語学教師論

下野 ● 新しい外国語教育といえば、本学でもCALLシステム導入が動き出しています。松本先生もこれに絡んでおられますが、CALLは英語だけなのでしょうか。

松本 ● 他の外国語でもあるみたいですね。たとえば中国語の四声を波形で表示して、自分の発音とのズレを視覚的に表示できるものとかもあります。

若杉 ● 中国語の場合、CALLに限らず教授法自体も英語と比べると、まだ熟していないように感じます。もちろん、中国語教育における具体的な方法論の模索は行われていますが。

松本 ● 教授法のことですが、近頃は、英語教授法という狭い概念から、第2言語習得理論という大きな概念へと移行しているみたいですね。完全に解明されているわけではないですが、第2言語が習得されるそのプロセスを理解して教えなければなりません。外国語の発音・語彙・文法の知識を教えるだけで、学習者がその言語を実際に使えるようにはならないでしょう。

太田 ● 僕は11年間ソウルにいて、たまたま延世大学で日本語を教えることになったんですけど、最初はダメでしたね。日本語のネイティブ・スピーカーであることと、日本語教師であることは違うんです。教授法を学ばないと教えられない。それで、音韻論や教授法の理論をかじって、やっとついていけるようになりましたね。

松本 ● 英語のネイティブも同じですね。ある程度英語のできる学生を相手にするにはいいけれども。

若杉 ● 言葉を「話せる」と「教えられる」は違いますよね。特に教える相手が初級になればなるほど。実は、中国語も昔は、ネイティブが教えられるという意識があったんですよ。しかもテキストは、北京で出版されている留学生を対象としたものが多用され、種類もごく限られていたと聞いています。

太田 ● 将来は、朝鮮語教育学を学んだ人が朝鮮語を教えるべきでしょうね。ただ、現状ではそうはいかない。まわりを見ても、日本へやってきた留学生か、僕のように向こうに行った人が朝鮮語を教えているんです。

松本 ● 専任・非常勤をあわせても、佛大には英語教育専門の人はあまりいませんね。昔は「英文学専攻」⇒「英語教師」という発想がありましたから、その流れかもしれません。ただ、近頃の専任教員公募を見ると、専攻分野が「英語教育学」限定というのが多くなっていますね。個人的には、全教員が英語教育プロパーでなくてもいいのではないかと考えています。中学校・高等学校の学習指導要領を見ても、外国語学習の目的は外国語によるコミュニケーション能力養成と異文化理解ですから。

太田 ● でもまあ、語学教育を専門とする教師が主流になるべきだとは思いますが。

若杉 ● わかります。教えるのにはスキルが必要ですね。

カリキュラム改革

松本 ● 語学教育の専門家が少ないという現状で、どのように外国語教育を展開していくのか、これが佛大における課題でしょう。とりあえずは与えられた環境でやるしかないわけで。英語の新カリキュラムでは、学生に何を教え、何を身につけさせるかを考えました。到達目標を設定し、必修科目を3種目

に分け、統一テストを使って習熟度別クラス編成を導入しました。本当は英語力だけではなく、興味・関心、目的、学習意欲も考慮したクラス編成ができればいいんですけど、現実的には無理でしょう。全体的な底上げか、上位の学生を引き上げるのかという問題もあります。朝鮮語はどうですか。

太田 ● 朝鮮語は今年から改革がはじまったばかりで、まだ、英語みたいなどころまでは考えていません。ただ、これまでみたいのはやめました。受講生が固定しない上に、レベルもばらばら。教師もお互いに連絡を取らないので、授業内容が重なってしまうということもたびたびあったようです。

若杉 ● 中国語もそうでしたよ。この点に関しては、非常勤の先生方からも苦情をいただいています。授業内容の重複に加えて、必須事項の欠落もあるようです。きっと他の先生が教えているだろうという憶測をして、実は誰も大事な部分を言っていなかった、なんてことも稀にあるらしいんです(笑)。

太田 ● 今年からは、各セメスターにおいて基礎2・会話1クラスを受講ですが、クラスは固定します。教師もお互いに頻繁に連絡を取り合うことになっていますから、同じ内容が意味もなく二度繰り返されることはありません。去年と比べて、ほんとのものすごくよくなりましたよ。

学びやすい外国語は？

下野 ● 英語・中国語・朝鮮語の3つのうちで、われわれが学ぶならどれでしょうか。

松本 ● 英語は絶対的に国際語と言えますので、必ず身につけておきたい言語ですが、でも難しいですね。日本語と英語とでは根本的に文字・発音・文法・語彙が異なっています。ヨーロッパ人には学びやすい言語なんですけど、ドイツ人なんかすごく上手ですよ。中国語は漢字を使っていますし、朝鮮語は何となく日本語と似ているような気もするのですが、どうでしょうか。

太田 ● 僕の独断ですが、日本語を母語とする人が一番勉強しやすいのは、朝鮮語です(笑)。語順が日本語とほぼ同じで、助詞もあります。だから、若干の違いはありますが、日本語のように書くこともできます。発音さえクリアできれば、あとは大丈夫だと思いますよ。

若杉 ● 中国語は漢字を使用しますが、そのことが逆に会話能力の向上を妨げているように思います。頭の中で漢字をならべてそれを読み上げていくのでは、会話のスピードについていきません。そうではなく、音のかたまりとして覚えるようにすべきです。ですから、漢字依存の弊害を取り除くために、ローマ字表記だけの会話学習用テキストもあります。中国語の論文は読めても、話せないという方はたくさんいらっしゃいますからね。

太田 ● 朝鮮史をやっている第一世代の先生方は朝鮮語が話せませんでしたね。最近の世代は、歴史専攻でも文学専攻でも朝鮮語が話せますが。

松本 ● 英語の場合、今では話せて当然という感じですが、実状となるとノーコメント(笑)。昔は、話せる人はペラペラだけど、話せない人はさっぱりできないという感じですね。

——— こんな調子で夜はふけていくのであった(次号に続く)

(文責:松本真治)

平成15年度授業評価アンケート結果報告

【はじめに—授業の目的】

「現代社会と職業」は、我々を取り巻く現在の社会的環境（政治・経済・国際情勢・企業経営など）を理解し、働くこととはどのようなことを理解し、卒業後のライフプランとキャリアプランを考えることを目的としている。在学中から広く周囲のことに関心を持ち、調べる（仮説をたてて検証する）、行動する、考えることで経験と知識の蓄積をすることが大事であることを理解してもらうことが大事だと考えている。学生は講義を通して積極的に自分の目で確かめる、自分で調べることを大事にする姿勢を醸成し、卒業後の選択肢がたくさんあることに気づき、選択肢を広げている。

【授業の進め方・ポリシー】

「学び」には先人が確立してきた知的財産と、我々がこれから作っていく財産とがある。状況を正しく理解してこれからの社会を予測し、自分の「これから」を考えることは重要である。授業では①相手（興味のある学問・社会・企業・仕事など）を知る②自分（中にある強みと持ち味、興味・関心・適性）を知る③社会を知る、ことを中心に進めている。学生が抱えている卒業後の不安のほとんどが「知らない」ことから来ている。従って、知ることで不安が解消され卒業の進路の選択肢を増やして行ける。

基本的なテキストは使用しているが、毎回オリジナルで書きこみ式のレジュメを作成し配布し、特に学生の理解を促進し、記憶に残すために「キーワード」を大事にしている。経験上、企業の人事担当者・ジャーナリスト・コンサルタント・研究者としての視点を活かし、講義を進めている。また、受講態度の向上で社会に通用する「相手意識」を身に付けて習慣化してもらうために、必ず定時に始まり定時に終わり、学生も遅刻や私語、着席の際のルールを守ってもらう。誰もが持っている24時間という時間の財産を大切に有効活用して、何かを生み出すことの重要性を認識してほしいと思っている。

授業は80名ほどが受講しているが、毎回授業の冒頭で、その日に起こった出来事や気になるニュース・社会的現象などアップデートの情報を提供し、学生に「思う」「感じる」「考える」機会を与えている。授業を興味深く聴き集中できる環境を作るためには、学生に「期待感」を抱かせることが大事だ。授業の最後には出席カードを兼ねて毎回感想文を書かせている。初回は自己紹介と関心のあること・授業に対する期待を書いてもらっている。人はそれぞれ理解の枠組みが違う。仮に学生の理解にバラつきがある場合（決して学生の理解不足とは思わない）は、説明不足を補うために翌週の授業の最初に確認のための講義をする。他大学の授業を含めると週に約900名の学生の感想文に目を通すことになるが、学生も一方的に講義を聴くばかりでなく「発信」できることの大切さを理解し、毎回書いているうちに伝える力や文章力も確実にアップしてくる。ほとんどの学生がスペース一杯に書いている。授業の後半になると、各自目標を設定し、達成するための方法を考えアクションを起こそうというメッセージが多くなる。何に関心があるのか

知ることもでき、参考にもなる。

また、毎回6人の学生に1分間でスピーチをしてもらう。各自が興味・関心のあることでテーマを決めて、自分の言いたいことをわかってもらえるように伝える努力をすることで、人前で話しをすることの大変さや重要性を認識してもらう。同世代の関心事や意見を聞くのは貴重な経験である。お互いが「場と時間を共有」していると認識すること、双方のコミュニケーションは大事だと実感している。

〈文責：非常勤講師 就職部キャリアアドバイザー 鈴木賞子〉

私の授業は厳しいというのが学生の専らの噂のようだ。事実、「私語は犯罪である」として決して許していないし、講義系の科目は試験のみの評価で、授業に集中し、ノートを整理し復習をしなければ合格は難しいので、例年、受講生の3〜4割が不合格となっている。4回生の演習系の科目でも毎回出席を義務づけており、就職活動を理由とした欠席も認めていない。

私が授業に「厳しい」のは、「勉強をしない福祉従事者は利用者にとって有害となる」ことを体験的に知っているからである。また、「利用者の人権と人格を尊重し、良質の福祉サービスを提供するためには、生涯勉強を続けなければならないし、それが福祉従事者の職業倫理だ」と固く信じているからである。私のゼミを選んできた学生に対しても、「講義概要に明記しているように、このゼミは来春、福祉現場に出る君たちが利用者の立場に立った福祉実践ができるソーシャルワーカーを養成する場と位置づけているので、このゼミにおいては君たちを学生としては扱わない」とはっきりと伝えることにしている。

授業において特に工夫していることはないが、学生に厳しく臨んでいる以上、私自身も誠実に対応しなければと思ひ、準備にはできるだけ時間をかけ、わかりやすい、学生の知的好奇心を喚起する授業となるよう努めてはいる。また、社会福祉従事者には専門以外の幅広い知識が求められるので、老人福祉論など講義系の科目では、学生が福祉現場に出た際に必要となる法律、経済、医学知識や介護技術などをできるだけわかりやすく説明するようにしている。演習系の科目では、福祉従事者に必須となる聴く力、観る力、伝える力（書く、記録する、話すなどの総合的はコミュニケーション能力）の養成に最も力を入れており、そのための教材や資料は、私自身の現場体験を基にしながら用意するようにしている。

長く福祉現場にいた私が大学教員になったのは、大学教員や研究者に憧れたからではない。良質の福祉実践ができる人材を育てるためである。それゆえ「厳しい」授業にならざるを得ないが、それを学生諸君が評価してくれているとすれば、現代の若者も捨てたものではないし、教育の場に転じた者として嬉しく思う。

〈文責：社会福祉学科 永和良之助〉

平成15年度授業評価アンケート結果報告

初等教育教科専門国語にしても初等国語科教育法にしても、わたしは教育現場での実践と重ねて講義をするようにしている。実際の教室や子どもの様子を語らずしてその科目の本質に迫ることは難しいと考えているからである。講義のあとの学生との雑談を聞いていると、実践を重ね合わせた講義をすることは、学生の興味や関心を喚起したり理解を深めたりすることに役立っているようだ。

これらの科目は学生にとってまったく未知な世界というわけではない。学生自身がかつて小学生だったころ学習してきているからである。それなりの下地はできていると言える。

ただし、それだからこそやっかいでもある。「経験した」ということや「得意だった」ということと「教職科目としてそのことを理解できている」ということとは別である。ましてや「自分が教師になったときに授業ができる」ということとはまったく違う話である。

しかし、学生の中には「小学校の国語くらい何とかかな。」と思っている者も少なくない。そのような学生に「教えるということ」はどのようなことなのか、「教えなければならないこと」は何なのか、「教えられるようになる」には何をすべきかということを感じさせるとともに、その資質や能力の育成を図らなければならない。これは簡単なことではない。

国語科に限ったことではないだろうが、学生にとって教科の固有性や教科の本質を理解することは簡単ではない。これまで学ぶ側であった者が教える側になるわけであるから当然であ

る。教える側の人間になれるようにするためには、学生を単なる講義の受け手として固定させてしまってはいけない。

わたしは、常に国語科教育についての考え迷う存在、つまり、大学生にとっては簡単であるはずの小学生レベルのことがらに対してさえ自信をもてないという「居心地悪さ」を実感させるようにしている。このことは、教科を知ることであり、小学生という子どもを理解することである。

ベルマーク運動ではないが、その移行を「無理なく無駄なく根気よく」させていこうとするのがわたしの講義である。もちろん価値ある無駄は大切であるが半年という期間は本当に短い。

他の教科教育を担当されている先生方の講義方法と重なることも多々あるだろうが、わたしが心がけていることは、

- ①国語科教育理論を実際の実践と重ねて語ろうとしていること。
 - ②時として5号館の講義室を小学校の教室と化して自らが模擬授業をしようとしていること。
 - ③教材論や指導論についてはその変遷を講義するとともに現在の新しい教材や指導方法も紹介しようとしていること。
 - ④学生と双方向でやりとりできるよう、意見交流をしたりメールを使ったりしていること。
 - ⑤学習の記録を作成し学びを共有しようとしていること。
- などである。

〈文責：達富洋二〉

活動記録

- 4月5日 基礎学力調査1回生実施
- 4月6日 基礎学力調査3回生実施
- 4月6日 TOEIC Bridgeテスト1回生実施
- 4月27日 第1回教授法開発室会議
- 5月19日 第2回教授法開発室会議
- 6月29日 第3回教授法開発室会議
- 6月21日～7月10日 春学期授業アンケート実施
- 6月11日 平成16年度私情協教育の情報化フォーラム参加
- 7月3日 私情協第12回全国大学情報教育方法研究発表会参加

スタッフ紹介

教授法開発室	室長	原 清治 (教育学科)
	室員	笹田 教彰 (人文学科)
	〃	八木 透 (人文学科)
	〃	有田 和臣 (人文学科)
	〃	松本 真治 (英米学科)
	〃	黒田 恭史 (教育学科)
	〃	達富 洋二 (教育学科)
	〃	奥野 哲也 (臨床心理学科)
	〃	近藤 敏夫 (現代社会学科)
事務局	岡崎 祐司 (社会福祉学科)	
	教学部長	内藤 三義
	教授法開発室課長	久保 明
	教務課長	水谷 俊之
	通信教育部学務課長	石田 忠司
教授法開発室主任	下野 隆喜	
教授法開発室専門職員	藤田 智之	